

高見順集

現代の文学々々
23

現代の文学 = 23

高見 順 集



生命の樹
激流
死の淵より

河出書房新社

現代の文学23 高見 順集

川 貝

© 1965

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和 40 年 7 月 1 日

初版印刷

昭和 40 年 7 月 8 日

初版発行

定価 390円

著 者 高 見 順
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 高 橋 武 夫
装 幀 原 弘(N.D.C)

印 刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表3711
振替口座 東 京 10802

製本・小高製本工業K・K

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

生命の樹……………三

激流……………一九二

死の淵より……………四五一

年譜……………四六一

解説……………山本健吉……………四六七

挿画 福本章

高見
順集

生
命
の
樹

She is a tree of life…… Proverbs 3 : 18

第一章

鎌倉の僕の家へ由美子が電話をかけてきたのは、これが初めてである。おっつけ一年になろうという由美子とのつきあい、こうして直接、電話してくるなどというのは、かつてなかったことである。しかも最初にその電話に出たのが僕の妻で——由美ちゃんから電話よと僕に取りついだのだが、由美子と僕との情事を知っている妻の声は、たとえ平静を装っていても穏やかではなかった。

僕はいわば二重に狼狽させられながら、僕もしかしそれを平静で隠して、朝っぱらからなんだと電話に出てみると、いきなり由美子が、

「先生？ あたし、切られちゃった……」

ただならぬその声に僕は、うッと息を呑んだ。

「顔を、あたし、切られちゃったのよオ」

と尻あがりの声で由美子は言って、あとは激しい咽び泣きにかわった。

「誰に？ いつ？」

「昨夜遅く……。すぐ来て、先生。由美子んとこへ来て——」

涙で声がとぎれがちだった。この由美子と僕は昨夜——それは何時ごろだったか、抽象的に言えばやはり昨夜遅く別れたのだが、あれからあのアパートに男が来て由美子の顔を切ったのか。

「アパートじゃないの。アパートは大丈夫なの。アパートで、あたし、待ってますから——」

「どこで、そんな……」

切られたのだ？ は言葉にできなかった。

「代々木の家」

と由美子は言ったが、僕はその家は知らない。家の近くまで送ったことはあるが、その家へ行ったことはない。

「君は昨夜、アパートに泊らなかったのか？」

アパートには、いつもやっぱり、泊ってなかったのだなど、つい咎める声になっていて、

「あれから、代々木の家へどうして？」

「電話じゃ、いや。会って、あたし、お話しします」

口をきくのが不自由らしいその声は、切られた顔が縋

帯で固く縛られていることを僕に告げる。顔のどこを、どんなふうに切られたのだろう。

僕の胸は痛んだ。そこには狼狽もあった。僕のほかに男があることを、由美子は僕に隠し通していたが、その顔を切るようなそんな深い仲の——大変な仲の男がやはり由美子にはいたのだ。それを由美子が今まで僕に、ひた隠しに隠していたことについて——今まで僕もそのことでは幾度も念を押したのだが、そのつど否定しつづけてきたことについては、由美子はこの期に及んでも、うそをついてごめんなさいの詫びはもとより、なんにもひと言も言わない。顔を切られた衝撃で、小さな女の心はいっぱいで、そんな余裕のないのは当然とも思えるが、僕の狼狽は、

「それで、相手は僕のことを知ってるの？」

と僕に言わせた。僕の言うその「相手」が由美子の顔を切ったのは、自分のほかに由美子が男をつくったのを知っての兇行にちがいない。

「先生とは知らないの。あたし、なんとなく、四人ばかり名前を言っていたんで、そのなかに先生も入っているとは入ってるけど……」

「四人？」

騒いでる僕の心に、嫉妬の暗い翳がさした。

「B社のOさんとか……出鱈目言っていたの」

Oさん？ これは僕も知っているひとだが、由美子と特殊の関係があらうとは思えない。出鱈目であることは僕にも分る。僕は僕とOとを除く他の二人は誰々か聞くことはしなかった。それも出鱈目を言ったとすると、この僕だけがひとりだけ出鱈目でない。

その僕のために由美子は男から顔を切られるようなことになったのである。しかし由美子は、僕に隠していた男のことについて僕に何も言わないかわりに、僕のために男から切られたのだと僕を咎めることもしないのである。そのことが僕に強く来た。

「とにかく、すぐ行こう。すぐ行く」

慰めるように力づけるように僕は由美子に言って、電話を切った。

「やっぱり男がいたらしい。男に顔を切られたそうだ」

と僕は妻に言った。

「まあ、可哀そうに……」

妻は泣きそうな顔をした。

「ちょっと見舞に行ってくる」

「行ってらっしゃい」

と妻は由美子に同情したが、

「でも、これで、あなたも由美子さんと別れられるわね」

僕に背を向けて、妻は呟くようにそう言った。

伊関君。

君と久しぶりに会ったのは、この朝、こうして僕が東京へ行くために、あたふたと乗った横須賀線の電車のなかでだった。

「悪魔研究会の忘年会は、とうとうやれませんでしたね」

年が改まったら、ひとつ新年会をやらうと君は言った。気が顛倒していた僕は、うつろな顔きをしているきりだったが、この日は、忘れもしない、十二月二十七日である。

「香取君がそう言えば、陽子にすっかり夢中なようですね」

文芸評論家の香取が僕らの悪魔研究会に入ったのは、ほかならぬ君の紹介で、メンバーとしては一番新しいのだが、それがイの一番に「悪魔になった」と君は笑った。

悪魔研究会は、悪魔を研究する会というより、僕ら自身が悪魔を実践する会になりそうだと、メンバーのひとりの倫理学専攻の学者が、いつか、会の流れで銀座に出たときに冗談を言った。君の言う「悪魔になる」はその意味だった。香取は新進気鋭の評論家でメンバーのなかでは一番齢も若い。それだけに「悪魔になる」ことも一

番早かったのだろうか、またそれだけに心配だと君は言

って、
「夢中になるのもいいが、生活がなんだかメチャメチャなようだ」

研究会のメンバーはおおむね四十代の学者で、各大学のいづれも教授や助教授クラスというなかへ、まだ三十そこその、仕事もまだはつきりした形のを示していない香取を入れるのは、どうかという話もあったが、君が彼の俊英を買って推薦した。学者ばかりのなかに、小説家は私ひとりというそうした私の孤立への配慮から、君は文芸評論家の香取を会に加えたところもあるようだ。僕は君を介して初めて香取を知った。

その香取が陽子という女を知ようになったのは、これはいわば僕のせいなのである。

「香取君よりもこの僕が——僕の方が、すっかり悪魔です」

と僕は君に言った。僕等の前の座席には——この横須賀線ではいつものことだが、外人と日本娘のパンパンとが腰かけていて、傍若無人にふざけちらしている。この十年間、あきるくらい見せつけられ、見なれた風景なのだが、僕はどうしてもなれることができない。僕はむかむかしながら、

「実は伊関君、銀座のバー・Rの由美子、あれから電話

があつて——大変なことになつちやうた。男に顔を切られたというんですよ」

小声のつもりだったが、昂奮は僕の声を、前のパンパンにも聞える高さにしていたのか、女がびっくりした顔を僕に向けた。そのパンパンの小鳥のようなすばしっこい顔の動かし方は、由美子にそっくりだった。子供供した身体つきも、そう言えば由美子に似ている。僕は溜息をついた。

「やっぱり、男がいたんですね」

いないわけはないのだ、そう言っている君の顔だった。いないわけはないと僕にもかねて言っていたのに、僕はその君の言葉を受けつけなかったのだ。

由美子は僕を欺いていたのだが、そのうそが遂にばれた。欺かれた僕は、やっぱり由美子はいそをついていたのだと怒っていいところかもしれない。だが、僕の耳には由美子の嗚咽がはつきりと残っていた。その嗚咽が僕を呼ぶ。僕を由美子の方へとひきよせて行く。

「これから僕は、由美子のところへ行ってみようと思うんです」

僕は僕の妻が何かというときすぐ涙を浮べるところから、女というのは涙脆いものだと思っていたのだが、この由美子は当然涙を見せていいときでも、断乎として、そう言いたいほど、かつて決して涙ぐむということさえ

しなかった。一年近いつきあいのなかで、由美子が泣いたのは、今朝の嗚咽をも合めて、たった三度だ——あのとき一度、そしてあの場合に一度と、はつきりそれを覚えていくくらいで、

（この子は実に泣かない……）

と僕にかねて、舌をまかせていたものだ。

その由美子が泣いたのである。その激しい嗚咽は由美子が初めて僕に真情を示したと僕に告げるのである。縋ってくる由美子の手を僕は払うことはできない。それに何よりも僕は由美子を愛している。

「あなたが、しかし自分で、ひとりで出かけて行くのは、考えもんですね」

と君は慎重に言った。齢からすると僕よりずっと若い君が、僕に忠告するように言った。これは、僕がえてして軽率なせいもあってか、君は普段でもそうなのだが（例えば僕がノイローゼのときに、君がいろいろと僕の身を心配してくれた、あのときからの習慣かもしれない）この場合はひとしお、僕の軽率を心配する口調で、「ひとりで行くのは、どんなもんかな。放っておくのも、もちろん可哀そうだけど」

そして君は、明日なら一緒に行けると言ってくれたが、僕は電話で約束した以上、行ってみると言い切った。

「そうですか」

と君は折れて、

「しかし、女の顔を切るなんて、どんな事情があるにしろ、ひどい男があったもんだ」

「全く……」

僕らの常識からは考えられないことだ。そう僕が言う
と君は、

「顔を切るなんて、やくざのすることですね。これはや
っぱり、相手はかたぎの男じゃないな」

「やくざ？ あの由美子には、どうも男がいそうだと
いう気はしていたんだが、まさか、そんなやくざみたいな
男がいようとは思わなかった」

「まごまごすると、今度は、あなたが切られる……」

一年近くもつきあっていて——その前に更に一年、特
別の関係に入る前の普通のつきあいの時期があつて、都
合二年という長さにもかかわらず、由美子にそんな男の
あることを僕が知らなかったとは、それでも小説家かと
君に笑われそうだ。社会学をやっている君は、社会心理
については自分にまかせておいてほしいが、人間心理
——男女関係の機微については小説家の僕にまかせよう
と、いつも言っていたものだ。これでは僕は全く小説家
失格である。

それだけ、由美子の欺し方がうまかった——というよ
り、僕の欺され方がうまかったのである。そして僕の欺
され方もうまかったけれど、僕は僕自身をうまく欺して
いたのだ。

僕は自分で勝手に美化したイメージをつくりあげて、
そのイメージでもって由美子を見ていた。そのイメージ
がだんだんと、そしてしばしばこわされそうになったと
き、そのときこそほんとうの由美子というものが掴める
ときだったのに、僕は逃げた。イメージのこわされるの
が、こわかったのだ。こわすのはいいが、そのことから
由美子が僕から逃げて行くのを恐れて、むしろ欺されて
いた方がいいと思つたのか。いや、もしかすると由美子
自身が、僕を欺すというより自分を欺していたのだとも
思われる。

あの由美子という女はどういう女か、いまもって僕に
はよく分らない。そもそもあの由美子に会つた最初にま
で溯つて、あれはどういう女なのか、改めて僕は考えて
みたい。

君はよく僕に、

「あなた方の小説には、なにかというと、バーの女が出
てくる。他に女がいらないみたいだ。バーの女は、もうい
い加減にしてほしいですね」

と言っていた。君にはどうも恐縮だが、由美子はバー

の女である。

僕にとってしかし、由美子はバーの女というより——女である。

*

「ニュー・フェースの由美子さん」

とバー・Rのママが僕に由美子を紹介したのは、店の一隅にガス・ストーブの火がまだついていていた季節だった。寒がりやの僕は、ガス・ストーブの近くの席に腰かけていた。バー・Rはその一年ほど前に開いた店で、僕の友人がそのママをひいきにしていた関係で、僕もここへ来るようになったのである。

「こういうバーは勝手が分らないで、由美さんも当分はトチってばかりいるでしょうけど、可愛がってあげて下さいな」

ママひとりに喋らせていて、当の由美子はいたずらをした中学生が先生に呼びつけられたみたいな顔をしていた。素人っぽい感じだが、しかしズブの素人というのとも違うのは、そうやって口をきかないで立っていられるあたりに何か出ていた。はたしてママが、

「由美子さんは、あたしと同じような出の人なんですよ」

とちょっと照れたようにして言った。ママは昔、浅草のレヴィウ劇場で踊っていたことがある。

「やっぱり踊りの方？ どこに出てたの？」

と僕は尋ねたが、由美子は恥しそうに——ズブの素人の羞恥とはちがうそれで、顔を伏せた。舞台をやめてバーの女給になるということは、本人としては落ちたおもいに相違ないから、僕がそんなことを聞くのは残酷だった。

「歌が由美子さんは得意なんですって。ね、そうね」

助け舟を出すみたいにママが言ったが、由美子はその身体つきからすると、歌手というよりは踊り子の感じだった。しかし踊り子としてはちょっと小柄だとも思えた。その由美子は、こういう場合、新参の女給が客に向って言う、

「どうぞ、よろしく……」

を遂に、金輪際、言わなかった。

——ずっと後になってだが、ママは僕に、こんな話をした。

「由美子さんって、ほんとに変ったひと。最初に、あたしんとこへ来たときなんか、ほんとにびっくりしちゃいましたわ。階段をトントンと男の子みたいに아가って来て、いきなり——あたしをここで使って貰えますかって、挨拶も何もなく、いきなり、こうじゃないですか。明日からお願ひしますわって、こっちの方が度肝を抜かれて、ヘコヘコしちゃって。すると由美子さんたら

——じゃ、さよならって、またトントンと階段を降りて
 っちゃうんですよ。こんなひと、うちで使えるかしらと
 思ったんですけどね。今になるとかえって、個性があっ
 て——この個性って言葉は、由美子さんのおハコ」

「募集の札でも見て、いきなり飛び込んだきたのかね」

「いえ、それはそうじゃないんです。マリちゃんとい
 ひとの紹介で……」

「マリちゃん？」

バーの女給にはよくある名で、僕もあるバーのマリ
 ちゃんというのを知っている。それかと聞くと、

「そのひとじゃなくて、よそのバーの……。同じバス
 で、しょっちゅう顔を合わせるうちに親しくなっ
 て……」

マダムはそのマリちゃんというのと今は仲たがいでも
 しているのか（と僕はそのとき勝手に推測したのだが）
 マリちゃんの話は避けて、話題をほかに移した。

マダムのそのびっくりしたという話を、あるとき僕が
 由美子にすると、

「だって、あたし、恥しかったんですもの。あたしっ
 て、そうなの。そういうとき、ツンツンしちゃうの」

「困ったもんだね」

「いいのよ、それで。先生って案外、通俗的な女が好き
 なのね」

バー・Rは小さな店で、そのころ女給は四人しかいな
 かったが、いずれも素人しょうとっぽい女ばかりだった。たとえ
 ば開店当時からいる慶子などは昼間、洋裁学校に通っ
 て、いわゆるアルバイトでこのバーに出ていた。（し
 かし、そのうち、学校を出ると、洋裁の方がアルバイト
 の形になったようだが……）そうした素人っぽい女たち
 の中で、新参の由美子は割合気楽に振舞っていた。

するうち、この由美子はD映画のニュー・フェースだ
 ったらしいという噂が、僕の耳に入った。由美子が自分
 から店で言ったのが伝わってきたのかもしれない。

ニュー・フェースと言っても大部屋女優のことだろう
 が、それにしても女優だったらしいと聞かされて、なる
 ほど単なる踊り子だったというだけでなく、そうだった
 のかもしれないと僕らに思わせるものが由美子にはあ
 った。女優として大成しそうな飛び抜けた美しさはな
 かったが、ニュー・フェースには一応なれそうだと見られ
 る魅力はあった。僕は新聞記者の友人の小宮との間で、
 こんな会話をかわした。

「あの子はきつと、ニュー・フェースで入ったのはいい
 が、撮影所の男と恋愛をして、これからという大事なと
 ころで映画をやめたというところかな」
 「若い駆け出しの助監督か……何か」

「ま、そういった男のために、自分が犠牲になって——男が一人前になるまで、自分がバー勤めで生活を助けよう……」

そんな、由美子の言葉で言えば通俗的な想像をさせるものが——女優を事実と思わせるものと同時に、そういうものが由美子にはあった。

明るい勝気な性格を、小鹿のようなほっそりした身体、そのきびきびした動作に現わしている由美子だが、ひよっとすると暗い表情をその顔に宿すときがあった。

眼蓋がひとえのためか、眼が小さく見えて、眼の大きな女性の放つ派手さを持ってないが、鼻筋の通ったその顔は決して陰気な顔ではない。しかし何か放心したような顔のときは、ひとえ眼蓋のあの京人形のあどけなさとも

もにそのうつろな寂しさがそこに漂うのだった。スタンドのとまり木にひとりで、ぼんやりと腰かけて、男でさえ足のとどかないとまり木だからもちろん宇宙に浮かせたその細い足を組んで、ラジオから流れてくる華やかで甘い、それ故、物悲しい音楽に耳を傾けながら、なにを見てもない眼を、洋酒を並べた棚のあたりに向けているときの横顔などがそうだった。うつすらとあけた唇から、白い前歯をのぞかせて、そしてふと、そのルーージュを薄目に塗った唇をとじたりするその口もとに、寂しく暗い翳が見られる。それは薄倅の翳とさえ言えそうだった。

た。それと勝気な感じとは結びつかないようで、しかし勝気だからかえて自分の運命を自分でもって閉じたというふうにも察せられる。閉じると同時に、閉ざされたことになった自分の運命を、やはりときには暗いおもいで見ているようだ——そんなふうに僕には思われた。

「いくつだろうか」

「二十——二、三かな」

と小宮はふんだ。バー勤めの女としては珍しく由美子は酒も煙草も口にしなかった。

とにかく感心な子だと僕は意見が一致した。愛する男のためにバーに出ているというその推測を、僕はしかし由美子に話して、それが事実かどうかをたしかめることはしなかった。

たしかめないではいられないほど、僕は由美子に関心を持っていたわけではなかった。だが、僕は、次第に心を惹かれて行ったのである。

春頃になると、由美子もすっかりバー勤めになじんだふうで、

「いかが……」

とビールをすすめたりした。小宮を通して知り合った時目という男と、僕はこのとき一緒だった。由美子は僕のコップにビールをつぎながら、

「どうぞ……と言っちゃ、いけないですってね。いかが……と言わなくちゃ」

「へーえ、どうして？」

「どうぞ……と言うと、押し売りするみたいで、感じが悪いんですって」

「マダムに教えられた？」

「いいえ、お客さまがそう言ってたわ」

僕のコップにはうまきビールをついだが、時目のコップには、置きつぎのせいもあってか、つぎすぎて、泡がコップから溢れてテーブルを濡らした。

「ごめんなさい」

由美子は、つと立って、

「ダスター頂戴」

とバーテンダーに言った。そこるところが——その呼吸というか間というか、それがいかにも、言ってみれば玄人っぽい見事さで、僕は、おや？ と思った。

「お台ぶさんのことを、ダスターというのか」

ふきんでテーブルを手早く拭いている由美子に僕は言った。そのダスターという言葉もそのとき初めて僕は知ったのである。

「君は前に、こういうお店に——アルバイトか何かで出てたことがあるの？」

「キャバレーの舞台で、あたし、歌をうたってたことが

あるんです」

両手を胸の前にやって、舞台に立ったときの気取った恰好をして見せて、

「銀座にS芸能社というのがあって、そことの契約で出てたんですけど、美空ひばりなんかもその芸能社にいたんです」

「ひとつ歌ってくれないか」

時目が言うと、

「駄目」

意外に強い拒否だった。

「そうですか。無理にとは言いませんよ」

皮肉か譲歩か、その慇懃な言葉からは分らなかった。流しの楽士が入ってきた。

「踊らない？」

と時目が由美子に言った。これは拒まず、由美子は僕の目の前で時目に抱かれた。

ぴったりと抱き寄せて、時目の踊りはうまかった。

僕はダンスができない。ねたましい眼で見ていると、二回ほど踊ったところ、急に由美子は時目の胸を手で突っぱねて、身を離れた。

時目は、癖の、頭のうしろを掻きながら、顔をにやにやさせて、席に戻ってきた。僕にはその顔がひどくワイセツに見えた。

由美子はその時目のうしろから、何か取りつくろうように、

「時目さんは踊りが、うまいわね。うますぎるわ」

と言って、丸い椅子に腰をかけたと思うと、すぐ立って、

「あたし、歌うわ」

*

合い着がそろそろ暑くなりかけたころ、久しぶりに僕がバー・Rに行くと、由美子の姿が見えなかった。マダムが由美子さんは盲腸でお休みなんですすよと言った。

「一緒に踊ってたら、急に由美子が、お腹が痛い痛いと言って、しゃがみこんでしまった。盲腸らしいというんで、自動車を呼んで大騒ぎだった」

ちようどそのとき居合わせたという小宮が、あとで僕にそのときの話をして、

「まさか、あれは芝居じゃあるまい」

とつけ足した。

僕は湯河原の宿屋に、仕事に行った。

二階の部屋の窓の外に、竹の葉が繁っている。茎のふしのところから交互に細い枝を出して、その枝のさが更に細い小枝に分れているのに葉をつけているのだが、その葉の繁りが小枝をしなわせていて、ちよつとの風に

でも軽く揺れた。ほかの木の葉がじっとしているときでも、竹の葉は敏感に動いていた。

僕はその葉の緑が、竹によって濃いのと淡いのとがあるのを見た。濃い緑の葉は何かすがれている。そう見えるのは、淡い緑の方が、ひどくいききしていて、鮮やかな色だったせいかもしれない。それは今年竹の葉なのである。

僕は机を離れ、窓辺に立った。机からは竹の葉しか見えなかったから、葉だけでなく茎や根もとまで見える位置に僕は立って、思わず、ああと言った。今年生えた竹の、白い粉をふいた茎がまた素晴らしいのだった。今年生えたとと言っても、つい二三月前に生えた——たった二三月の間に一気に成長したその今年竹の茎のみずみずしさは、僕の眼をとらえて離さなかった。

じっと見ているうちに、由美子の方が頭に浮んできた。由美子の肢体には若竹を思わせるものがある。(盲腸は、どうしたかな?)

——散歩に出たときに、僕は竹の茎に近づいてみた。

茎についた白い粉は、粉と仮りに僕は名づけたが、ふつと吹けば飛ぶあの粉の感じではない。さりとて、白ペンキか何かをべったりと塗りつけたふうでもなく、表面にさらりと、つまり白い粉をふいた感じなのである。僕は試しに手で触ってみた。案外なような、またしかし予想